松塾資料⑫『黄帝内経』と古代思想（3）黄老思想(その3)

**王の治身は治国の本である**

**『黄帝内経』に流れる黄老の「治身治国」思想**

 　　 2014.10.4

 　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　於・神田、都師会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　 　松田 博公

　今回は、『黄帝内経』の経文を取り上げ、それを理解するには、黄老文献に流れる**「治身治国」**の概念が必要であることを論証してみよう。

　『素問』霊蘭秘典論は、体内の藏府と国家の官僚制度を対応させ、国家の健康の基礎は君主の健康であると述べている。また、『霊枢』師伝篇、外揣篇は、鍼治療と「治国」は同じことだと説明している。こうした健康観、国家統治観は、戦国以降の中国の政治思想とどう関係していたのだろうか。それが従来、充分知られていなかったために、『黄帝内経』のこれらの文章は、正確に理解されてこなかった。これらの文章の意味は、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』など、戦国末以降の黄老文献を踏まえることで、正しく解釈できるのである。

*「黄帝問うて曰く、願わくば十二蔵の相使貴賤は如何を聞かんと。岐伯対（こた）えて曰く、悉（つ）くせるかな問うや、請いて遂くに之を言わん。心なる者は君主の官なり。神明これより出づ。肺は相傅（そうふ）の官（＝宰相）なり。治節これより出ず。肝は将軍の官なり。謀慮これより出ず。胆は中正の官なり。決断これより出ず。膻中は臣使の官なり。喜楽これより出ず。脾胃は倉廩（そうりん）の官なり。五味これより出ず。大腸は伝導の官なり。変化これより出ず。小腸は受盛の官なり。化物これより出ず。腎は作強の官なり。伎巧これより出ず。三焦は決瀆（けっとく）の官なり。水道これより出ず。膀胱は州都の官なり。津液ここに蔵さる。気化すれば則ち能く出ず。凡そ此の十二官は相い失するを得ざるなり。」（『素問』霊蘭秘典論）*

*「心なる者は、君主の官なり、神明焉（これ）より出ず。⋯⋯⋯故に主明かなれば則ち下、安んじ、此れを以て生を養えば則ち寿、世を歿（お）うるまで殆（あやうから）ず。以て天下を為（おさ）むれば則ち大いに昌（さか）んなり。主、明かならざれば則ち十二官危うし。使道（＝気血の道）閉塞して通ぜず。形乃ち大いに傷る。此れを以て生を養えば則ち殃（わざわい）あり。以て天下を為める者は、其の宗（＝国家、民族）大いに危うし」（『素問』霊蘭秘典論）*

*「黃帝曰く、余は先師に聞く、心に蔵する所あるも、方に著さず（＝心に記憶しても、木簡には著録せず）、と。余、願わくは聞きてこれを藏し、則（のっと）りて之れを行い、上は以て民を治め、下は以て治身し、百姓をして病無く、上下和親し、德澤下に流れ、子孫に憂い無く、後世に伝えて、終る時、有ること無からしめん。聞くことを得べきか。歧伯曰く、遠きかな問いたまうことや。夫れ民を治むると自ら治むると、彼れを治むると此れを治むると、小を治むると大を治ると、治国と治家と、未だ逆いて之を治ることあらざるなり。夫れ惟だ順うのみ。順うとは、独り陰陽脈論、氣之逆順のみにあらざるなり。百姓人民皆、其の志に順うことを欲するなり」（『霊枢』師伝）*

*「黃帝曰く、余、九鍼九篇を聞き、余、親（みず）から其の調を受け、頗（すこぶる）、其の意を得たり。夫れ九鍼なるものは、一に始まりて九に終わる。然れども未だ其の要道を得ざる也。夫れ九鍼なるものは、之れを小にすれば則ち内なく、之を大にすれば則ち外無く、深きこと下と為すべからず。高きこと蓋と為すべからず、恍惚として竅り無く、流溢して極り無し。余は其の天道、人事、四時の変に合するを知る也。然れども余願わくば之を毫毛に雜え、渾束して一と為さん、可なるか。岐伯曰く、明かなるかな、問や。独り鍼道のみに非ず、夫れ治国も亦然り。*

*黄帝曰く、余、鍼道を聞かんことを願えり、国事に非ざるなり。岐伯曰く、夫れ治国なるものは、夫れ惟だ道（＝天道、天地の法則性）のみ。道に非ずんば、何ぞ小大深浅をして雑え合わせて一と為すべけんや」（『霊枢』外揣［すい］）*

これらの篇の言うところ、特に『霊枢』師伝、外揣篇の意味は、はっきりしない。なぜ、ここで突如として国家統治の論理が身体の健康維持の論理や治療原則と重ねられるのか。それは、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』という黄老文献に一貫して流れる「治身治国」思想を参照しなければ、明確にならない。

*※『霊枢』は『素問』より古いという見方もある。しかし、『霊枢』師伝篇の「治身＝治国」の主張の曖昧さ、および上記の『霊枢』外揣篇、下記の玉版篇の問答のわざとらしさが、『霊枢』の幾篇かが書かれたのは漢代よりも後であることを物語るかもしれない？　つまり、かつては常識として医療と国事は同じことだと考えていたのに、そうではなくなってきた時代に書かれたと想像できる。次の文章も同様である。*

*「余、小鍼を以て細物と為すなり。夫子（＝先生）乃ち上はこれを天に合し、下はこれを地に合し、中はこれを人に合すと言う。余、以為（おもえ）らく、鍼の意を過ぐと。願わくば其の故を聞かん」（『霊枢』玉版）*

　『国語』晋語篇に「上医は国を医す」とある。「治身＝治国」の考え方の源流がここに示されている。以下、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』とたどってみよう。

【管子】

「我が心治し、官（政治）乃ち治し、我が心安んじ、官乃ち安んず」（内業篇）

「心安んず、これ国安んずるなり。心治す、これ国治するなり」（同心術下篇）

「心の体に在るは、君の位なり。九竅の職にあるは、官の分なり。心は其道に処り、九竅は理に循（したが）う。嗜欲充益すれば、目は色を見ず、耳は声を聞かず。故に曰く、上、其の道を離るれば、下、其の事を失う。馬を代えて走ることなく、其の力を尽せしめ、鳥を代えて飛ばすことなく、其の羽翼を弊（つかれ）せしめよ。物に先んじて動くことなく、以て其の則を観よ。動くならば則ち位を失い、静かならば乃ち自から得る」（同心術上篇）

【呂氏春秋】

「治身と治国は一理の術なり」（知度篇）

「およそ事の本は、必ず先ず身を治す」（同先己篇）

「昔は先ず聖王其の身を成して天下成る。其の身を治めて天下治まる」（同）

「天下を取らんと欲すれば、天下取るべからず。取るべきは、身まさに先に取るべし」（同）

「夫（そ）れ、慎むことを知らざる者は、死生、存亡、可不可、未だ始めより別あらざるなり（＝最初から分別がないのである）。⋯⋯此れをこれ大惑と謂う。かくの若（ごと）きの人は、天の禍する（＝わざわいを降ろす）ところなり。此れを以て身を治むれば、必ず死し必ず殃（わざわい）あり。此れを以て国を治むれば、必ず残（そこな）い必ず亡ぶ。夫れ、死殃残亡は、自ずから至るにあらざるなり。惑い之を召（まね）くなり」（重己［＝おのれを重んじる］篇）

【淮南子】

「いまだかつて身治して国乱る者を聞かざるなり。いまだかつて身乱れて国治する者を聞かざるなり。身は事の規矩なり」（詮言篇）

「心は身の本、身は国の本」（同泰族篇）

「それ欲に従いて性を失い動けば、いまだかつて正しからざるなり。以て身を治すれば則ち危うく、以て国を治すれば則ち乱れ、以て軍に入れば則ち破れる」（同斉俗篇）

　上記のアンダーラインの個所を参照すれば分かるように、『素問』霊蘭秘典論は、黄老文献の「治身治国」論の延長に、王の治身と国家官僚制による治国を同等に語っている。しかし、『霊枢』師伝篇、外揣篇は、戦国の気風そのままに、「治身と治国は一理の術なり」と明快に語る『呂氏春秋』に比べて、持って回った曖昧な言い方である。それが、『霊枢』師伝、外揣が書かれた時代に、「治身治国」思想は、既に人々の率直な常識から離れていたことを思わせる。

　では、前漢思想の集約点であり、黄老文献の終着点でもあった董仲舒の『春秋繁露』では、「治身治国」思想は、どう扱われているだろうか。そこでは、国王の治身の論理と、官僚を駆使すべき新たな段階に至った治国の論理とがうまく結びつけられている。巨大国家の複雑になった官僚制度に合わせ、「治身治国」思想も深化を遂げている。「王の健康」と「国の健康」という二つの領域が、「虚静、謙遜」の修養状態を保つ王の身体を軸に結合されている。この論理構造は、戦国の「治身治国」思想そのままである。

　「気の清き者を精と為す。人の清き者を賢と為す。身を治むる者は、精を積むを以て宝と為し、国を治る者は、賢を積むを以て道と為す。身は心を以て本と為し、国は君を以て王と為す。精、其の本に積めば、則ち血気相承受し、賢、其の主に積めば則ち上下相制使す。血気相承受すれば、則ち形体苦しむ所無く、上下相制使すれば、則ち百官各々其の所を得る。形体苦しむ所無くして、然る後に身得て安んずべきなり。百官各々其の所を得て、然る後に国得て守るべきなり。夫れ精を致さんと欲する者は、必ず其の形を虚静にし、賢を致さんと欲する者は、必ず其の身を卑謙す。形静かにして志し虚なる者は、精気の趣く所なり。謙尊して自ら卑くする者は、仁賢の事（つか）うる所なり。故に身を治める者は虚静にして以て精を致し、国を治る者は卑謙を尽くして以て授を致すに務む。能く精を致せば、則ち明を合して寿に、能く賢を致せば則ち徳沢洽（あまね）くして国太平なり」（通国身［＝国・身通ず］）

　ここで、黄老思想が「治身治国」思想と密接に結びついていたことを証すだめ押しの証拠を取り上げておこう。『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』の系譜からすれば番外といえる、『史記』の序文「太史公自序」に収録されている司馬遷の父・司馬談の文章「論六家要旨（六家の要旨を論ずる）」である。この文章は、前漢初期の思想界地図を俯瞰しながら、黄老思想について解説した基本的資料とされている。

　　そこには、黄老思想の信奉者であった司馬談の手で、「陰陽・儒・墨・名・法・道」六家の長所、短所が要約され、最もバランスが取れ国家統治に有用な思想は、「道家」であるとされていた。

　まず、陰陽・儒・墨・法・名が論じられる。

　陰陽の術：陰陽・四時・八位・十二度・二十四節、それぞれが教えるところがあり、これに順う者は昌え、これに逆う者は死なずとも亡びるとするが、必ずしもそうではない。このように、人をこだわらせ畏れさせる。春は生じ、夏は長じ、秋は收め、冬は藏するのは天道の大いなる筋道であり、これに順わなければ、天下の綱紀はないとする。

　儒者：博識であるが肝要な点は少なく、骨を折るわりには効果は少ない。

　墨者：倹約を重んじすぎて順い難い。

　法家：嚴格で愛情に欠けている。

　名家：詭弁は人を縛り、真実を見失なわせる。

　最後に「道家」である。

　「道家は人をして精神專一ならしめ、動きて無形に合し、万物を贍足（せんそく＝充足）す。其の術たるや、陰陽の大順に因り、儒墨の善を採り、名、法の要を撮り、時とともに遷移し、物に応じて変化し、俗を立て事を施し、宜しからざる所なし。指約にして操り易く、事少くして功多し。儒者は則ち然らず。以為（おも）へらく、人主は天下の儀表なり。主倡（とな）えて臣和し、主先だちて臣隨う。此（かく）の如くなれば則ち主労して臣逸す。大道の要に至りては、健羨（＝剛健、貪欲）を去り、聡明を絀（しりぞ）く。此れを釈（す）てて術に任ず。それ神は大いに用うれば則ち竭（つ）き、形は大いに労すれ則ち敝（やぶ）る。形神騷動して、天地と長久なるを欲するは、聞く所にあらざるなり」*（道家は人の精神を純一にし、行動は形なき究極者に合致し、それ自身で充ち足り万物にゆきわたる。その方法は、陰陽家の大順をうけつぎ、儒家と墨家の長所をとりいれ、名家・法家の要所をつかまえ、時勢によって移り、物に応じて変化して、習俗をたて政事をするのに、どれも適切でないものがない。儒者はそうではない。思うに、君主は天下のお手本である。君主が主張し臣下が合わせ、君主が先に立ち臣下が隨うという状態では、君主が苦労して臣下が怠ける。大いなる道の肝要なことは、貪欲を去り、聡明を排することであり、それらを捨てて政術（＝黄老の術）に任せることである。まことに、神は大いに用うれば竭（つ）き、形（＝肉体）は大いに労すれ敝（やぶ）れる。形神を騷ぎ動かしながら、天地と共に長久なることを欲するなど、聞いたことがない）（笠原祥士郎「前漢の道家思潮と厳君平について」*（北陸大学紀要第32号、2008を部分的に改訳）

　「道家は無為なり、又曰く為さざるなしと。其の実は行い易く、其の辞は知り難し。其の術は虚無を以て本を為し、因循を以て用と為す。成勢無く、常形無し、故に能く万物の情を究む。物の先と為らず、物の後と為らず、故に能く万物の主と為る。法有りて法無く、時に因りて業を為す。度有りて度無く、物に因りて興捨（きょうしゃ）す。（略）凡そ人に生じる所のものは神なり、託す所のものは形なり。神大いに用れば則ち竭き、形大いに労すれば則ち敝れ、形神離れれば則ち死す。死者は復た生きるべからず、離者は復た反るべからず。故に聖人は之れを重んず。是れに由りて之を観れば、神は生の本なり。形は生の具なり。先ず其神を定めずして、「我、以て天下を治むる有り」と曰うは、何に由る哉」*（道家はなにもしないことをたてまえとする。それを「為さざるなし」ともいう。その実は行い易く、その言葉は解し難い。その術は虚無を根本とし、自ずから然るままに従うことを働きとする。決まった姿はなく、変らざる形がない。だから万物の情を究めることができる。物に先立たず、後れることもしない。だから万物の主となることができる。法を立てるか立てないかは、その時に応じての業である。基準を立てるのも、相手に応じて合わせる。人には天から与えられた神が生じ、それは形（＝肉体）に託されている。神大いに用れば竭き、形大いに労すれば敝（やぶ）れ、形神が離れれば死ぬ。死者は再び生き返ることはできない。神が形を離れてしまうと再び帰ることはできない。だから聖人は形神を尊重する。このように考えれば、神は生の本であり、形は生の道具である。先ず神を定めずして、「我に天下を治める用意あり」などと言うのは、どんな根拠があってのことか）*（同）

　「道家」という命名は、太史公自序に初めて現れるが、一読して、司馬談のいう「道家」が、われわれのいう道家、すなわち老荘道家ではないことが明らかである。ここで混同すると、意味不明となるので要注意である。司馬談が最も優れた政治思想と評価し、実際に当時の宮廷で勢力を持った「道家」とは、陰陽家のいう天道思想を核とし、『老子』の無為自然の思想に順い、儒家、墨家の長所を採り、法家、名家の主張を取り入れた総合思想「黄老道家」だったのである。

　この文章は、黄老思想が諸子百家の長所を採用した統合思想であるという本質を言い当てた見事な記述である。そのことは研究史の中で古くから気づかれていた。しかし、この黄老道家概論に、わざわざ君主の「治身」の重要さが述べられている意味を察知できた学者はほとんどいなかった。つまり、司馬談は「治身治国」論を核に、黄老道家の思想的特質を抽出していたのだが、学者たちはその意味の重要さを見過ごしてきた。黄老思想の伝統をまだトータルに把握できていなかったのである。

　しかし、それは今だから言えることである。そう言えるようになるには、1973年、長沙馬王堆の前漢墓から、『黄帝四経』と目される4文献『経法』『十大経』『称』『道原』が現れ、研究史が一挙に加速する必要があった。その後の研究史の進展とともに、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』が黄老思想の観点から系列化できるという解釈が生まれ、その「治身治国」思想がその系列を一貫して流れていることに初めて研究者は気づいたのであった。

　司馬談の述べる「治身治国」思想の文言と、『淮南子』詮言篇の「いまだかつて身治して国乱る者を聞かざるなり。いまだかつて身乱れて国治する者を聞かざるなり。身は事の規矩なり」の文言は類似している。司馬談「論六家要旨」と『淮南子』は前漢・武帝時代の初期、同じころの編纂であるとされている。

　いっぽう、わたしたちが黄老文献の系譜の源流としてきた『黄帝四経』に目を転じると、明確に「治身治国」の概念と指摘できるものはまだ登場していないようである。「治身治国」に関わる言葉としては、『黄帝四経』と総称される『経法』『十大経』『称』『道原』４篇のうち、黄帝と臣下の賢者が対話する『十大経』五正篇に次のように見られるだけである。

　「黄帝、閹冉（えんぜん）に問いて曰く、吾は五正（政）を布施せんと欲す。焉（いず）くにか止まり、焉にか始めん、と。対（こた）えて曰く、始むるは身に在り。中に正度（＝正しい基準）を有（も）ち、后に外の人に及ぶ。外内交接せば、乃ち事の成る所を正す、と。⋯⋯黄帝曰く、吾は身を未だ自ら知らず。若何（いかん）せん、と。対えて曰く、后（＝王）、身を未だ自ら知らざれば、乃ち深く淵に伏し（＝深山に隠棲し）、以て内形（＝精気が充実した身体）を求めよ。内形已に得れば、后は自ら知り吾が身を屈せよ。黄帝曰く、吾は吾が身を屈せんと欲す。吾身を屈するは若何せん、と。対えて曰く、道同じき者は其の事も同じ、道異なる者は其の事も異なる。今、天下大いに争う。時至らん。后、能（よ）く慎みて争うこと勿（な）からんか、と。黄帝曰く、争うこと勿かれとは若何ぞ。対えて曰く、怒なる者は血気なり。争なる者は外脂膚なり。怒若（も）し発せざれば、浸廩（しんりん、＝浸透した米穀の気）是れが癰疽を為す。后、能く四者（＝血、気、脂、膚）を去れば、枯骨何ぞ能く争わんや、と。黄帝、是において其の国大夫を辞し、博望の山に上り、恬臥すること三年、以て自ら求む」

　黄帝と臣下の対話という形式で、天下に君臨するには王の心身修養が第一に重要だと説く『十大経』と『黄帝内経』との関係は、興味深いテーマではあるが、『黄帝四経』の他の書物には、同様な議論は見られない。「治身治国」思想が、はっきりと言及されるのは、『黄帝四経』以後の『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』においてである。そのことが、『黄帝四経』の古さを物語るように思える。

　最近刊行された中国出土資料学会編『地下からの贈り物』（東方書店）では、複数の論者が統一見解のように、『黄帝四経』は漢初に成立したと想定しているが、それは新しすぎるのではないか。それでは、『史記』が記録している戦国後期、斉の稷下の学での黄老学派の活躍を説明できない。また、『黄帝四経』が漢初の著述なら、それに先立つ『管子』『呂氏春秋』が明確に打ち出している「治身治国」論を踏まえた文章が存在しないのはおかしい。従ってここでは、『黄帝四経』を、『管子』より前の初期黄老文献と位置づけておきたい。

　【結論】

（１）『素問』霊蘭秘典論篇には、「心は君主の官」であり、身体の心と政治制度上の君主の二つがともに健康であることによって、王の藏府と国家の官僚制度の二つも健康であり得るし、王が心身の健康を維持しない状態で政治を行うなら、国家も宗族も危機に陥ると述べられている。この経文が、『管子』『呂氏春秋』『淮南子』『春秋繁露』と同一の意味の文章を含んでいることからも、霊蘭秘典論篇が、戦国以降の黄老文献が伝承する「治身治国」思想を継承していることは明らかである。『黄帝内経』は、「治身治国」思想においても、黄老思想の系譜上にあるといえる。

（２）わたしたちが、黄老文献の源流であると位置づけてきた『黄帝四経』には、『十大経』五正篇を除き、「治身治国」思想は明らかではない。そのことは、「治身治国」思想が明確な形をとったのは、『管子』以降の戦国末期であることを推測させる。いっぽう、『十大経』には、黄帝が心身を修養し、「血、気、脂、膚」を制御し、（恬淡虚無の）枯骨となれば、怒りを抑えて、政治的な成功者となれることを説き、「治身治国」論の原型が表現されているかのようである。

（３）『十大経』が、『黄帝内経』と同じく、黄帝と臣下の賢者が対話する形式を採っていることも、今後の検討に値する。

（４）『霊枢』師伝篇、外揣篇が、「天道に順う」という鍼治療の原則を「治国」になぞらえながらも、「治身治国」論をはっきりと展開していないのは、「治身と治国は一理の術なり」と明確に言い切った『呂氏春秋』に象徴される先秦漢代よりかなり後の、「治身治国」論がもはや常識ではなくなった時代の著述であるようにも思われる。『霊枢』は『素問』よりも古いという説もあるが、すべての篇がそうではないことの例証かもしれない。